



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成20年
3月号

毎月23日発行
通巻451号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成20年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



フデリンドウ (奈良市某所にて) 奈良市 川端一弘さん撮影(文・5頁)

昭和45(1970)年3月23日 月次祭法話より

何を祈るか

法主 矢追 日聖 (満58歳)

今月の月次祭はお彼岸さんのうちに入っています。東大寺二月堂のお水取りを、私らは「おたいまつ」と言うんですが、奈良ではこのお水取りが済めばぬくうなってくるかと申します。あるいはまた、暑さ寒さも彼岸までとか申します。

例年ですと、今日あたりは春たけなわの気候であっていいんですけど、何か知らん今年は、雪が降ってみたり、昨夜あたりもかなり寒かったし、天候不順なようです。

毎年、三月二十三日の月次祭では、お彼岸さんの話をしました。お彼岸さんになると、墓へお参りする。大阪の方であれば、四天王寺に行つて鐘をついてもらう。それも悪くはないんですけども、そういうものは古い信仰のあり方のひとつです。

現代における信仰のあり方、また信仰する者の心構え、毎年言っておりますので、みなさんよくご存じと思いますが、それが非常に大切だと思っております。

法然、親鸞、日蓮の時代

今、みなさんが信仰しておる宗教というものは、だいたい七、八百年とか千年前、あるいはもっと昔に生まれたものが多いんです。新幹線ができて、東京まで三時間で行ける時代に、宗教だけは昔のまま、草履はいて弁当上げて歩いていくんですよ、そんなふうにいる人がおるんですね。

法然上人、親鸞上人、日蓮上人、この

人たちが生きた当時の社会はどうであつたか。それは、現代とはまったく違う社会なんです。ここにひとりの権力者がおる、あるいは武家がおる。事の前後を問わず、そのときの権力者に逆らつた場合、打ち首なんです。もう理屈もなくでもない。殺されるんです。

弱い立場の者は、何を言われてもご無理ごもつとも、殿さんから小便かけられても、ああぬくい雨ふつてきたと喜ばなければならぬ。逆ろうたら殺される。そういうような時代であつたんですよ。鎌倉時代の人たちの文章に、「白骨の御文書」と呼ばれるものがたくさん出てきます。「明日に紅顔ありて夕べに白骨となる」という言葉が出てくる文章で、日蓮上人や親鸞上人の御遺文などにもそんなことが出てくる。鎧、甲冑をつけて、飛ぶ鳥を落とすような身なりをして横行闊歩しておつたような人が、夕方になると河原でさらし首になつて白骨になつていく。

あの頃の世相がそうだつたんです。そういう不安定な時代には、権力者の下に無条件でさつと入つていく。それがいちばん安全圏だつたんです。ところが戦争が起きると、その権力者が負けてしまう。勝つた方が喜んでいても、その権力者も次には負ける。まあ、そのいちばんひどかつたのが、平安の後期、平清盛が天下を制覇した頃、その前後の頃でした。あの頃の京都では、三条河原、五条河原とかにはさらし首がたくさんあつて、死骸がいたるところにほかしてあつたんです。

法然上人が出てきたのは、そういう世相の時です。浄土信仰ですね。弥陀一仏に頼らなければいけないというような教えは、そういう世相から生まれてきているんです。

親鸞上人の場合、出家そのものがあまりにも偽善的だ、という立場があるんです。奥さんは持た

ない、精進齋する、それが聖者だと考えられておつたけれども、肉体を持つておるんやから性欲もある。親鸞は人間的に悩みを持ちました。

男女がひとつになつて、子どもを産んで子孫を増やしていく。これが天地自然の定め、天の道ですよ。けど、当時の出家はそうした天地の行動に反しておるんです。

そこに悩みと疑問を持つたのが親鸞だつたと思ふんです。それで還俗し、妻も持ち、世間の人と同じような生活もする。出家としての権威も持たず、偉ぶるところもなしに、庶民と共に歩いたのが親鸞だつたと思ふんです。私はね、鎌倉のあの時代において、親鸞はたいした人やつたと思ふんです。

けれど、あの人も法然の法灯を継いでおりますからね、教えそのものはやっぱり西方浄土の信仰に持つていく。というのは、今、言いましたように、その当時の世相そのものがね、そういうような教えを生ませる時代だつたんですよ。

それとはまた相対的に、日蓮上人のように、幕府の足元をすくうような生き方をした人が片方におつた。親鸞は庶民の中に教えを説いていきましてけれど、日蓮という人は、為政者に体当たりしていった。そういう信念の人ですが、まあそういうようにして、いろいろ変わった人が出てくる。それが、鎌倉という時代であるんです。

宗教は時代の中から生まれる

もし基本的人権が叫ばれている現代に、法然や親鸞や日蓮や、あるいは道元といった宗教人が生きていたらどうであつたか。おそらく、彼らがあの時代に言い残したようなことは言わなかつたと思ふんです。言う必要ないんですよ、あんなこと。

宗教というものもいつも、その時代の中から生まれてきます。では、昭和の現代、どういふような宗教で行かなきゃいけないのか。

宗派、教派で一国一城の主のような城を構えて、そこに信者を集めて勢力争いをする。派閥争いをする。大きな堂を建てて競う。ちょうど戦国の時代と同じ形をとつておるのが、現代の宗教団体のあり方なんです。

さきほどから言うように、明日に紅顔あつてもですね、夕方には白骨となる。そういう時代に生きておつた人たちは、神さん、仏さんといった絶対者にすがる。朝は飯食つておつても、晩には殺されるかも分かんない。その人生はあまりに惨めな度が過ぎる。この苦しい世の中、いわゆる苦の毒の世界、これは平安、鎌倉の時代を言うんです。今と違ふんですよ。

あの時代は、生きていくこと自体が不安定であつて、自分自身の本当の幸せというものを守つてくれる者がなかつた。権力者、為政者が思うままに世の中をあやつつた時代ですから、どないもならんかつた。とにかく、家を焼かれてもご無理ごもつとも、食べるものを盗つていかれてもしようがない、娘をさらつていかれても親は泣き寝入り、どこにもすがるところがないんです。

そこから、いわゆる無常観が出てくるんです。せめて死後の世界だけでもいいから、楽しい世界があつてほしい。その楽しい世界に生きたいと願つたのが、一般庶民だつたんです。

そういうような時代であつたがゆえに、法然や親鸞の教えが、大衆の中に浸透していったんです。その民衆の気持ちの中にとけ込んで布教した親鸞上人の気持ちには、優越感や劣等感、あるいは権威や権力は一切なかつた。

だから私は、京都の本願寺を見れば、涙が出る

んですね。皇室と縁結びして、東本願寺、西本願寺と何百万の信徒を寄せて、その上にあぐらをかいている。親鸞の法灯を継いだ人たちが、権威主義、権力主義になつていいる。親鸞をどうとらえておるのか、私は不思議でならない。京都に行くたびにそう思う。ここに、宗教の墮落があるんです。宗教は形にとらわれたり、権威、権力をカサに着るようではだめなんです。

現代に何を祈るか

過去、偉大な宗教家たちは、なんとかして人々を救わなきゃならない、社会を浄化しなきゃいけないと、生命を賭けてきました。ありがたい、立派な人々です。その人たちの心は汲まなきゃいけない。敬服しなければいけない。

けど、千年前、日蓮上人がこうおっしゃったから、現代人もその通りにしなければならぬとか、法然上人がこうやつたから、浄土信仰の者は現在こうしなければならぬというふうには、過去の宗教家の言葉や行いをそのまま持つてきて、その通りにしなきゃいけないというのは、東海道をわらじで歩くようなものです。

今の時代、人はみな平等であるという基本的な権利があります。この法律ひとつだけをみんなが守つてくれればですよ、もう宗教なんていりませんよ。ところが難儀なことに、憲法で定められたものでも、なかなかみんなはそれを守ろうという気にならない。

そこに、宗教的な訓練、宗教的な修行、信仰において精神的向上を図らねばならないという課題が生じる。

これは、現代という時代において何を祈るか、という問題なんです。昔のように、ただ自分だけ

の幸せ、自分の家族だけの幸せ、それだけを祈る時代ではない。こんなことは、あなたたちは分かっていると思うんです。

今、私たち個人個人は、昔のように切り離された生活はしていない。集団での生活なんです。とにかく汽車に乗つても大勢の人と一緒に。事故が起これば、みんなもろともなんです。飛行機が落ちれば、みんなもろとも死ぬんですよ。原子爆弾がここに飛んでくれば、私たちはみんな一緒に灰になるんですよ。信仰しておる者だけが助かるのか、信仰すれば私だけが幸せになれるとかいのは、千年前の話なんですよ。

今の時代は、自分は全体の中の一つの細胞である。そういう考え方で行かなければいけないんです。現代は、自分個人が幸せになるためには、自分も他人もみんなが幸せにならなくてははいけません。個人ひとりだけの幸せというものはないんです。自分たちと共に生活しておる社会の人たちみんなが幸せにならない限りは、自分個人の幸せというものはありえない。

そういうような気持ちになれるように、また、そういうような気持ちになれる自分自身を作るために、神さん、あるいは仏さんに手を合わせ、お祈りしてほしいと思うんです。これが、今の時代の信仰だと思っんです。

現代における宗教の目的

物質的、科学的に進歩するということが、これは非常に結構なんです。私ら、あの新幹線で三時間あまりで東京に行くんですから、その恩恵に浴して、ああけっこうやなと喜んでおるんです。

けど、物質面、科学面の進歩に伴つて、その裏付けとして、精神的な面、心の面でも向上してい

かなければ、現代は非常に危険な時代でもあるんです。人間が月に行く時代、この昭和の時代に、戦国の時代と同じような宗教であつてはいけません。それからまた、宗教団体が一国一城の主のような城をかまえて、信者を集め、大きな堂を競うようであつてもいけない。

目の前には、たくさんの木も草もございます。松は松なりに伸びて、桜は来月に入るともう咲くと思えます。桜の枝は気兼ねなく伸びておるんやけれども、枝と枝はお互いに譲りおうて格好よく榮えている。これが、神さんの心だと思っんです。

自然界では、異なるもの同士が調和している。自然界に現れているこの調和の美、これをいちばん大事にしなきゃいけない。

自分と人とは違ふんです。桜と松が違ふように個人差がある。その違ふ者同士が集まつて、そこに、ひとつの調和を生み出していく。

私たちの心の中において、いかなる人でも調和していけるように修養する。お互いみんなひとりひとりが幸せになろうやないか、幸せにならなきゃいけない。そうやって、みんな喜んで自分の生命を生きさせてもらつて、死んでいく。それが自然の心、神の心やないかと思っんです。

私が死んでも、

私はあなたの方の心の中で生きている

あんたたちが今、こうして大倭にお出でになつている。私がこうして、お話をしておる。

そのときに、「法主さんやから、あんなこと、ゆうとる。あれは、聞いていてありがたかつた。けど、わしらにはそんなこと、よう分からへんし、出来へん」。これでは、だめなんです。ひとつにな

私とあなたとは、ひとつなんです。ひとつにな

つていかなければ、信仰というものはだめなんですよ。

私の言葉があなたたちの心の中に生きておれば、ここに百人の人がおれば、私自身が、その百人の人々の心の中で生きつづけていくということなんです。私が死んで、肉体はなくなつたとしてもね、私自身があなたの方の心に生きておれば、残つたあなたの方が何をするのかという問題として、私の信仰は引き継がれていく。

それから、私の言うことが今、仮にあなたの方の頭で理解できなかったとしても、あなたたちの生命体、いわゆる靈魂は、言葉とともに出ていく霊波長を、あなたたちの魂の中で必ず受け取っているはずなんです。

現代の信仰 争いの心を捨てる信念の養成

まず、争わない心を持つ。他人も自分も、社会全体みんなが幸せになることを祈る心を持つ。そ

こもれる魂魄の地を訪ねて 第31回

やおいのみちまろ ととりへのようつ

箭負道麻呂と捕鳥部萬と犬の事(上)

平谷 照子

大阪府池田市

この原稿は法主さまの書齋に遺されていたのですが、このほど目にとまり、平谷さんのご了解を得て、原典からの引用部分などは少し省略した形で掲載させていただきます。(編集部)

これは、去る平成七年五月六日に大倭神宮においてになった、溝口省吾さん 邦子さん夫妻が語られた話の陰に、実は思いがけなく、法主さまの遠祖である箭負道麻呂という登美地方の豪族をア

ういう心をまず持たなきゃいけない。その心がなくて、口先だけで何を唱えてもだめなんです。口でどれだけ平和を唱えても、唱える人間の心の中に闘争の心があつた場合には、平和という言葉は死んでいゝんです。広島市の平和運動でけんかが起こるのはどうもおかしいんですよ。

ひとりひとり、心の中に、平和の信念を築いていく。そしてみんなが、世界の人たちみんなが幸せになるようにと祈る。自分を抜きにして、相手の幸せだけを祈るのと違う。自分も他人も、世界全体が幸せになるようにと祈る。

宗派や教派を争うような、そんな小さい信仰でなしに、人類がどうすれば幸せになれるのかを考へる。そのために自分を鍛え、精神的向上に努め、信念を養成していく。そういう信仰の在り方が、現代人の信仰だと思えます。

今日はお彼岸さんでもありませんから、ちよつとこういうような話もしたんですが、みなさん方もその点、よく心得て信仰してほしいと思います。終わります。(文責 編集部)

アップさせるという意図がこめられていたもの、と解して、この登美の豪族を予想したものであります。

心あたたまる日常生活の一事件に乗せて、豪族道麻呂について考えることを指図した、巧みな霊人の計らいに感謝します。

では、その発端となりました溝口さんの話とはこうでした。

溝口さんの住居のある岸和田市天神山二丁目一

の一六番地の周辺で、邦子さんが白い野犬を見るようになったのは、昨年(※平成六年)二月頃でした。目にひどい怪我をしていて気味悪くもあり哀れでもあり、保健所に連れて行くかとも思つたのですが、保健所に渡せばお定まりのコースが待っているだけです。恐る恐る餌を与えると、邦子さんになつくようになりました。

家には、シェットランド シープドッグのモモがいます。賃貸の条件があつて、これ以上犬を飼えませんが。思案の末に邦子さんは、白い野犬を葛城山に連れて行きました。住宅地では野犬を見ると、子供たちがいじめるのです。山でなら、何とか生きられるかもしれないと邦子さんは思いました。ところが帰ってきたのです——その白い犬が葛城山から——その後、京都の花背の方で飼つてもらえる家を見つけて連れて行きましたが、三日後に逃亡して、そのまま行方不明です。邦子さんは、犬がいなくなつた夢をみました。

こんなことがあつて後のこと、地域の家々に配布される天神山新聞に、天神山公園内にある「捕鳥部萬の墓と白い犬」の記事が載っていました。捕鳥部萬とは千四百年余りも昔の人です。物部の守屋の資人でしたが、守屋と蘇我馬子(そがのまこ)の間で仏教を受け入れるかどうかで争いが起こり、仏教排斥派の守屋が戦いに敗れて討ち死にします。留守を守つていた萬だが、それを知つて茅渟原(ちののすま)の馬香(うまか)へ逃げのび山中に隠れていました。萬の妻の家もこの辺りにありました。

朝廷の方では追つ手をさしむけ、萬を追い詰めます。弓の名手であつた萬は奮戦をし、遂に自刃をして果てるのです。朝廷方は、萬の屍を六つに切つて串ざしにせよと命じます。この処罰が行われた時、雷鳴と大雨がきました。

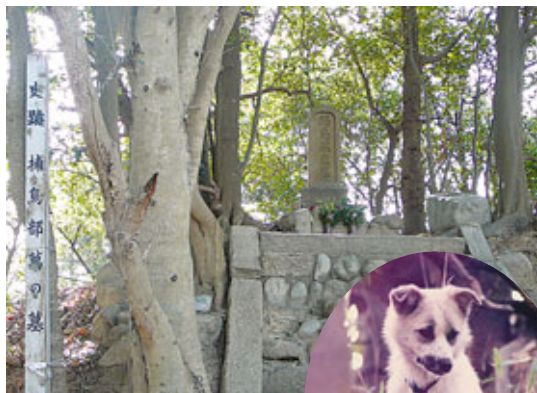
萬が飼つていた白犬は、屍を仰いで、その側を

回り歩き吠え続けましたが、とうとう主人の頭をくわえて、古塚に納め、その傍らに臥して餓死をしました。

これを報告された朝廷は、世に珍しい犬である、後々に伝えよと萬の一族に墓を作らせ、萬と犬を葬らせたという、そんな話だったので。

でも省吾さんも邦子さんも、このことで捕鳥部萬に心惹かれたわけではありません。その墓の周辺は笹や雑草が茂り、ゴミが散乱していて近寄るのも嫌だったので。

ところが今年の二月になって、またしても白い犬が家の辺りをうろつくようになりました。邦子さんは、どこからともなく白い犬が寄って来るのも、天神山公園の墓と何か関係があるのだろうかと思うと、その犬に哀れをかけずにいられなかったのです。首輪をかけて飼犬らしく見せ、子供たちのいじめから守ってやり、餌を与え、雨風をしるげのように庭に入れるなど



▲捕鳥部萬の墓

墓の側で子犬を生んだ犬の
ボンちゃん(結局、溝口家
で飼われた後は、もっと
ぶっくらした由)



して面倒をみている内に、子犬を四匹生みました。墓の側の崖下のくぼみで。

三月末に墓の周辺が清掃されて見ちがえるように綺麗になりました。邦子さんは子犬を見に行つて、初めて萬の墓に挨拶をしました。白い犬がその頃、たいそう咳をしていたので抗生物質を与えていて、犬の健康と子犬を助けて欲しいと、墓に水をかけて頼みました。

やがて犬の咳も治り、子犬はいつの間にか近所の男子生徒が連れ帰りましたが、飼いきれなくてまた捨てたのを、今度は女子生徒たちが、天神山二丁目の家々を回って飼主を探してくれました。

しかし、省吾さんは邦子さんを見つめながら、余りに犬のことに気を使いすぎる邦子さんとの間でもめることが、時に起こります。犬は省吾さんにはあまり愛想がよくないようです。

四月の末、省吾さんの中国語の先生である林修三さんが、溝口家を訪れました。ちょうどもめていた直後だったので、犬のこと、墓のことをとくと聞くはめになったのでしょう。そろって、捕鳥部萬の墓に詣りました。白い犬も一緒に。

林さんは祝詞を唱え、石笛の音を手向けました。犬が林さんの手をなめて親愛の情を表わします。「大倭へ行ってみませんか」と林さんが言い、この日、大倭神宮に來られたということでありました。

この話を聞かれた法主さまが、捕鳥部萬という人について調べてみるようにと、溝口さんが持参された墓の写真を、私に手渡されました。

何か古い記録にもとづいて、何時の時代にか墓及び墓碑が建てられたのです。その元は何だろ...? どこへ行けば探せるだろう? 私は『岸和田市史』というものがあれば...と電車で揺られながら、何となく考えていました。

と、チラツと「シヨキ」と頭の中に浮かんで消えた、儂いものがあって、「ヘエツ、日本書紀のこと?」と思ったのです。それにしても打てば響くように反応があったということは、何かあるのかと気付くと同時に、今度はモヤモヤとした波長をかぶつたが、それもまたたく間に失せた。

帰るなり、『日本書紀』を繰ってみると、やはりあった...:それによって、溝口さんの話を補足できたというわけなのです。(続く)

表紙写真について

(付)水野さんのこと

大倭会 川端 一 弘

春に可憐な花をつけるリンドウ属の一種。リンドウは秋のものとはかり思つてはいませんか。春のものは他にハルリンドウやコケリンドウ等があります。これらの簡単な見分け方は葉にあります。写真は美しさをご覧頂くために花を中心に撮っています。大倭会では五年前の五月、文化行事で三重県の御在所岳へ行きました。山頂付近でタテヤマリンドウを見られた方も多かったと思います。覚えておられますか。このタテヤマリンドウはハルリンドウの高山型とされるものです。ハルリンドウは湿気の多い陽光地に生えるもので、その環境適地が少なく珍しいものと云えます。

これに対してフデリンドウは野山の陽光地に生え、おそらく以前はこの大倭の付近でも生えていたでしょう。富雄川を挟んだ対岸の近畿大学農学部敷地内では生えており斜面の草刈りをして保全されています。このように小さな生物の生活生存の場所が少なくなってきました。難しく云えば生態系の多様性の減少です。

秋のリンドウは栽培が若干難しいですが春（こちらは越年草）のものはとても難しいです。可憐な花についつい持ち帰りたくなります。しかしその生活の場（環境）を見るのも重要なのです。

水野さんをはじめ知ったのはまだ大倭に自然が残っていたころでした。当時、大倭会はまだ申孝会、もしくはすさのお会と云っていた頃でした。また会は年輩者ばかりで、そのなかで若い方は水野さんのみでした。ある日、拝殿の日だまりで率直、真摯に大倭へ来られた機縁を語られたのを覚えています。その率直真摯な心は変わらずに、その後の大倭会での活躍は多くの方が知るところです。今あの日だまりのような暖かさに接することができなくなつたうつしみは深悼にくれるばかりです。

柏手合掌

追悼 大倭会演芸部長殿

大倭会 湯浅芳郎

なぜそんなにも早く行くの。同年輩として非常にショックです。思い起こせば、小生が大倭に通うようになった昭和五二年頃、旧拝殿の天井からぶら下げた太鼓の下に何時もおとなしい君がいました。

あれから随分と時が経ちましたが。その後法主様、カーサンと一緒に岡山にも何回も来てくれました。人を喜ばすのが大好き。人見知りする君が突然変身し、大倭の演芸部長を演じたのです。大倭会一泊旅行の宴会の司会、出し物、数々の名作、法主様も手を繋いで喜ばれた「花魁道中」、手作りの紅白テープの髪「連獅子の舞」と名演技を残してくれました。今にも白い背広に赤い蝶ネクタイで現れそうな君（※写真、左頁）。何時も旅行出発前日に我が家でにわか練習、蛇目傘など振り

回して障子をよく破つてくれました。これから文行事世話人としてどうしましょう。

また、「花の一座」の団員として各地の施設の慰問、交流によく行きました。岡山施設の毎年来てくれました。江州音頭 錦志廼家に入門し、よく唄つてくれました。また地元新口村の芝居「梅川 忠兵衛」（冥土の飛脚）にも大活躍。一度見に行きました。大倭会ゴルフも常連で賑やかにやりました。

大変なこともありましたね。暮れの大掃除、拝殿の屋根から石垣の直近に墜落、危機一髪、同乗して救急車で走つたこともありました。

黙々と掃除、何時も縁の下の力持ちでした。それなのに闘病生活苦しかったでしょう。見舞い一度しか行けません。ごめんさい。楽しい思い出を沢山作って頂きました。段々、此方より其方の方が賑やかになりそうですね。法主様カーサンを楽しませてあげてください。花魁道中の小道具一式は入れておいたよ。暫く皆を待つて下さい。それでは安らかに。

合掌

水野さん、ありがとう

大倭会 藤田啓子

皆さんがご存知のように、水野勝美さんはいつ会つてもニコニコとやさしい、やさしい人でした。常に人を気づかい、自分の事はいつも後まわしでした。

私と同じ昭和20年酉年生まれ、同い年のよしみでも言える仲間のようにお付き合いしてきました。たくさんの思いがあり何を書いてよいか迷いますが……。

法主様の最後の日帰り文化行事の時に（※平成7年5月21日、往馬坐伊古麻都比古神社へ）、雨

が降っている中、瑞光院から車の所まで、水野さんと高橋良美さんで両手を椅子の様に組んで法主様をお乗せして、私は後ろから傘をさしかけて下りて行きました。その時、二人の慎重に一步一步進んでいた姿を今も鮮明に覚えています。

水野さんは、お母さんが大倭安宿苑の八重垣園に入られてホッとしていましたが、それも束の間、たびたびお母さんから呼ばれて、いつも急いでかけつけていました。そしてお母さんが骨折して入院された時は、毎日荷物をまとめて家に帰ると言うお母さんを必死に説得したり、本当によくお世話されていました。そのお母さんが亡くなられた時には、あの水野さんが号泣したのです。私はかける言葉もありませんでした。

また鈴月かあさんの体調が落ち着いておられて、別荘（大倭病院）から食事に行ったり大相撲を見に行ったりと一緒に外出した時には、水野さんはまめまめしくエスコートしてくれました。楽しい思い出です。最後には一泊旅行まで行こうという矢先に、鈴月かあさんは急逝されたのです。そんな水野さんのまさかの入院でしたが、退院後は以前のように大倭の行事に顔を見せてくれたのに……。

自分が入院している時は、奥さんが来られると「来んでもいいのに」が口癖でした。私が冗談ぽく「本当は嬉しいくせに、素直にありがとうと言えはいいのに」と言うと、「そんなこと言われへんわ」と、気持ちを素直に口に出せなかつた水野さんですが、奥さんを愛し、子供さんを愛し、お孫さん達をこよなく愛していたことは、あの顔をみていたら、よくわかりました。

勝ちゃん、本当にいろいろありがとう。

また「和み」に、「水野スペシャル」を食べに来てね。待つてます。

寸 莎

第78回

故 水野勝美さん



地下水の心を生きる

水野勝美さんには、これまで何回となく「寸莎」に登場して欲しいとお願ひしてきたが、その度に、「またいつか」と笑顔ではぐらかされてきた。その「いつか」が帰幽後になつてしまつたのは返す返すも残念だが、いろいろな方にお伺ひしたお話しから、何とか「水野さん像」を浮かび上がらせてみたい。

水野さんは昭和二十年三月二十六日に大阪市平野区で男ばかりの五人兄弟の三男として誕生した。子供時代のことは弟の堀野利明さんから聞かせていただいた。「父は職人肌で子供のことは構わなかつたが、兄は兄弟思いで、自分のこともよく庇つてくれた。長い竹竿を振りまわして喧嘩を止めてくれたこともあつた」と兄への思いをかみしめる。

平野中学校を卒業してから夜間の

生野工業高校に進学し、昼間は郵便局の臨時雇いで働いた。利明さんは、「兄貴が少い収入の中から、当時貴重だつた串カツを食べに連れていってくれた」のを鮮明に覚えている。高校卒業後は大阪市水道局に就職し、定年になるまで勤めあげた。

水野さんが大倭と結びつきを持つようになったのは昭和四十年、二十歳頃のことだ。「私の体調が悪かつたという事で法主様宅を訪ねました。いわゆる御利益信仰から大倭と縁を持たせて頂いた訳です。それ以後、色々な相談事（泣き言）とか聞いて頂きました」と『おおやまと』（平成17年2月号）に彼独特の言い回しで記している。青山日元さんは、「あの頃の水野くんは、おとなしくて、ひ弱な感じさえあり、若いのは何してんや」と叱つたこともあつた。でも、熱心に大倭に通い続けてくれた」と当時をふり返る。

恵美子夫人と結婚したのは昭和四十七年十一月のことだ。法主様ご夫妻も結婚式に出席された。式の挨拶の中で、法主様が新郎のことを「私の息子」と表現したことで、水野さんは感涙にむせんだというエピソードがある。

今回、息子の勝成さんに、家庭の中で水野さんがどんな父親だつたかを問うたところ、「子供の頃には厳しい父親で、約束に反すると外に放り出されたこともある。幼稚園の時には、九九を風呂の中で言わされたり、父が作った計算問題をやらされたりもした」と意外な答えが返つてきた。

新口の水野家には婿養子で入つたので、地元で溶け込むために学校の行事や地域の祭りにも積極的に参加して、「子供たちからは『祭りのオツちゃん』の愛称で親しまれていた」と恵美子夫人は語ってくれた。

大倭の旧拝殿の片隅でいつもおとなしく座っていたような水野さんが、「大倭の演芸部長」と呼ばれるような明るい活発な面を見せるようになったのは、「柴地則之さんが平成元年秋に急逝した直後のことだつた」と杉本順一さんは記憶している。「その秋の大倭会の文化行事の夜の宴会で司会を務め、思い切り盛り上げてくれて皆を驚かせ、法主様も大

喜びだつた」と中西会長の千津江夫人は思い出を語る。中西会長は、「水野くんは大倭の行事の準備や片づけなどをはじめとして、地下水の精神で献身的に取り組んでくれた。掃除の時に拝殿の屋根から転落して大怪我した時には本心に心が痛んだ。青森にもう一度一緒に旅行しようと言っていたのに残念だ」と惜別の思いを語ってくれた。

四年前から江州音頭の錦志廻家に入門し、「お祭り男」に磨きをかけていた。師匠の大倉弘さんは、「週一回の稽古に一度も休まない熱心な弟子で、上達も早かつた。それに、実にマメに動く人だつた」とベタ褒めする。「花の一座」で各地の福祉施設と一緒に慰問に行く時でも、自慢の喉で音頭をとってもらい、大いに盛り上つた」と湯浅芳郎ご夫妻は口を揃える。

水野さんは闘病の末に今年の一月三十一日に六十二歳の若さで帰幽されたが、最後までまわりの人達への気づかいを忘れなかつたという。前号の『おおやまと』紙で、法主様のお言葉として杉本さんが記してくれている。「水野は自分の徳を持って帰ってくるから心配要らん。皆に言うてやれ」を聞くとは何かホッとさせられるのである。心からご冥福をお祈りしたい。

（岸田 哲記）

AWTCC日誌

2月15日 大倭神宮月次祭。
 2月16日 夜、交流の家でF I W C定例委員会。徳永なつさんに代わり、昨年9月から委員長を務めた五十嵐美穂子さんの就職先は東京。藤田美由紀さんが3代目女性委員長に。

2月23日 午後1時20分から大倭神宮にて申孝祭。午後2時より大本宮拝殿において月次祭。
 2月29日 大倭印刷株では長年稼動してくれた印刷機（B3オート活版機とGTOオフセット機）2台を搬出、そのGTO機担当だった聴覚障害の田中豊さん（72歳 勤続15年）も退職、皆から花束を贈られました。昇ちゃんも一目おく存在でした。

九法さんが帰幽（享年83歳）。法主さんの従兄弟で、お弟子第一号と言われる方です。大倭教草創期、大阪阿倍野橋を鈴月かあさん、青山日元さんと三人で教導されている勇姿が写真に残されています（真中の人）。

閑厚樹さん、大学院生の佐藤さんが来邑。「農的暮らし」「障害者との共生」「コミュニティの再生と活性化」が研究テーマのことです。
 3月9日 禊会。
大倭安宿死では

平成10年9月号『おおやまと』より



2月21・27日 4月採用予定者の事前研修会。
 3月6日 建築中だったケアハウス茂毛露園の引渡しを受けました。
 （菅原園）
 2月24日 なら100年会館にて春咲きコンサート（須加宮祭）の舞台や屋

職員で対戦しました。
 2月24日 映画会。普段見ない洋画を大画面で。
 （長曾根寮）
 2月14日 腹話術のボランティア（デイサービス）。記念写真を撮りました。
 2月16日 家族会主催のお楽しみ会。
 2月28日 外出会（デイサービス）。イトーヨーカドーへ買い物に行き、鰻料理の「江戸川」で昼食。

自由律の句。右の様に景や物事に出合つて湧いた感興を言葉にする場合と、先に想いがあつて景物事に託す場合がある。（1885〜1926）
 尾崎放哉
 春の山の向うから煙がでた
 自由律の句。右の様に景や物事に出合つて湧いた感興を言葉にする場合と、先に想いがあつて景物事に託す場合がある。

ATMIC
 * 月次祭（大倭神宮）
 4月6日（日） 午後2時より大倭神宮にて。
 * 須佐緒祭（大本宮）
 4月8日（火） 午前11時より大倭大本宮拝殿において祭典を行い正午より各自持参の弁当などで園遊会を行います。
 須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐（結び）の緒に感謝をするお祭りです。
 * 大倭会主催第四七二回禊会
 4月13日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
 * 箭負祭（大倭神宮）
 4月15日（火） 午後2時より大倭神宮にて。
 箭負祭とは、皇祖天神の鎮りまず登美の神奈備（大倭神宮）の靈威を法主日聖大恩師の遠祖（箭負氏）が代々祭祀し、神仕えしてきたことを記念するお祭りです。

* 月次祭（大本宮）
 4月23日（水） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

3月3日 大倭会会員、田中奇



第297回 大倭会文化行事

いましつづか 今城塚古墳とトマトの巨木見学

真の継体天皇陵かと言われる前方後円墳と、映画『地球交響曲』で紹介されたトマト栽培のハイポニカへ。

日時 平成20年4月20日（日）
 午前10時50分

場所 今城塚古墳前に集合

交通 各自JR大阪駅へ（近鉄学園前からは8:46分発快速・鶴橋で環状線乗換え）。9:45発東海道本線新快速・野洲行乗車→10:00高槻着。北口で高槻市営バス5番・関西大学行10:10発に乗車→「清福寺」下車、農道を約25分の散策（ハイポニカ横通過）。
 コース 今城塚古墳・昼食⇒（株）協和・ハイポニカ販売部へ（最盛期でトマトが鈴生り）。

※昼食持参（雨天の場合、ハイポニカで昼食）

問合せ 岸野春子 0742-44-0011（大倭印刷内）

編集後記

▼芽吹き頃となりました。広島県の歌人山本康夫師（故人）の言葉に歌を自ら求める人は心が清い、これは久しく体験して

ぐるり春山の呼んでも出てこぬ煙草屋さん 森彦
 （八重垣園）
 2月20日 雛壇の飾り付け。
 3月3日 ひな祭りの行事食と集いをしました。
 俳句投稿箱より 「柿の木に鶯の鳴く春近し」「春立つは暦だけなり炉燵護る」「下萌ゆる畦に沿ひ来しランドセル」

揺らいだことのない信条だと短歌読本の中に書いておられる。弛緩している神経が引き締まるともいわれている如く私も常に心の誠を持ちて作歌してゆきたいと思う今日この頃です。（房）